

烏城

第88号
令和7年6月発行
(2025年)

発行
岡山県俳人協会

事務局
〒700-0964
岡山市北区中仙道
58-111-103 左居方
TEL 090-7596-8093
振替口座01380-0-102923
(年会費専用)

令和七年度定例総会開く 決算、予算を承認、事業計画案を決定

春さざす陽光の中、令和7年度の総会が、3月9日(日)岡山県立図書館多目的ホールにて開かれた。出席者77名、委任状118通で成立した。柴田奈美会長の挨拶の後、新会員10名の紹介があった。令和6年度事業報告と決算報告がなされ、承認。新年度の事業計画と予算も全て承認された。なお、今年度は合同句集の発行年であること、秋の俳句大会講師には森田純一郎先生が予定されているとの説明があった。また、俳句大会での当日句のみの参加者には、資料代として1000円を徴収することも承認された。

役員(新任のみ)

幹事 井本 陽子 溝手千賀子

監事 山下 卓郎

名誉会員 古谷 静(前常任幹事)

退任 清中 蒼風(前顧問)

樋口千恵子(監事)

山本 那実(常任幹事)

森脇 八重(幹事)

事業計画

1 総会 3月9日(日)

岡山県立図書館2階多目的ホール

2 吟行句会

春季…3月30日(日)

岡山県天神山文化プラザ

秋季…10月予定



入選者表彰

3 第46回俳句大会 11月2日(日)

岡山国際交流センター2階

4 会報「烏城」6月・12月発行(88号・89号)

5 合同句集 第18集 5月募集開始予定

6 会員名簿 5月発行

7 協賛事業

岡山県現代俳句の書展

3月11日(火)～3月16日(日)

倉敷市文化祭俳句大会 5月24日(土)

倉敷市民会館2階大会議室

午後の句会には、74人148句の出句があり、3句を互選した。特別選者は5句選の1句を特選とした。披露の後、入選句の表彰が行われた。杉本征之進顧問の閉会の挨拶があり、3月未の吟行句会への参加を期して散会となった。

(新坂さくら)

特別選者特選句

石井 弘子 選

連風の園児の空を暴れけり

原田 慶子 選

いつもより固き三つ編み大試験

畑 毅 選

啓蟄や終の住処の窓を拭き

馬屋原純子 選

亀鳴くや手首まである生命線

赤木ふみを 選

達筆の偽名の手紙返る

小倉貴久江 選

朝光や水になりゆく薄氷

柴田 奈美 選

国引きの湖の落暉や蜩舟

互選高得点句

いつもより固き三つ編み大試験

啓蟄や終の住処の窓を拭き

先生の大きな名札入学式

亀鳴くや手首まである生命線

春風や搾乳の山羊目を細め

連風の園児の空を暴れけり

濁りより上げて根芹の白さかな

ふらここや転校の子と天へ漕ぐ

春宵のゆきひらの粥つぶやける

しろがねの雨を力に牡丹の芽

国引きの湖の落暉や蜩舟

赤木ふみを

田中 立花

古谷 静

小林 美鈴

杉本征之進

三垣 博

谷本 俊夫

田中 立花

古谷 静

原田 慶子

小林 美鈴

曾根 薫風

赤木ふみを

佐藤 史男

森脇 八重

景山 薫

景山 薫

谷本 俊夫



大会風景

現代俳句の書展

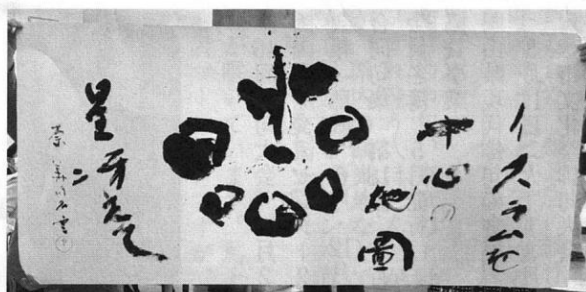
令和7年3月11日(火)～3月16日(日)
於 岡山県天神山文化プラザ

令和7年3月11日より3月16日まで、岡山県天神山プラザで、岡山県「現代俳句の書展」が開催された。最終日の16日には、岡山県近代詩文書道連盟、小竹石雲会長により、揮毫が行われた。100人程が見守るなか、まず小竹会長より「言葉は、ただ文字の練習ではない。その句をどう理解して、どう解釈するか。言葉とは、神の世界と人間の世界を取り持つもので、崇高なもの。丁寧に扱うこと」と挨拶があった。続いて、岡山県俳人協会、柴田奈美会長の二句の揮毫が行われた。

イスラムを中心の地図星冴えて

星という字を甲骨文字から選んだ。書体の違うものは統一感が取りにくい、句の雰囲気が出ると思い、また平和を願う気持ちを込めて書いた。図という字も旧字体にして、字に力を持たせた。

イスラムを中心の地図星冴えて



柴田奈美句
小竹石雲氏書

雪乞ひの神事と思ふ雪吊りは

日本の風情、その地方地方の持つ風情が表現出来たらと思ひながら書いた。数日かけて、色々な表現を使って書いた。そうすることにより、自分の中にたくさん引きだしを作り、作品の幅を広げることが出来る。



岡山県俳人協会赤木ふみを顧問挨拶

揮毫終了後、岡山県俳人協会、赤木ふみを顧問が、「近くで拝見していて、筆使いに春の風を感じた。星冴えての季語は、一番寒い季節だが、間もなく春が訪れるということ」とお礼の言葉を述べ、即吟で句を贈呈した。

(井本 陽子)

ふみを

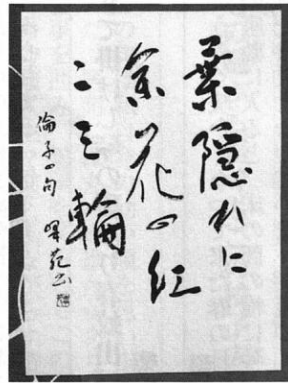


揮毫風景と観客



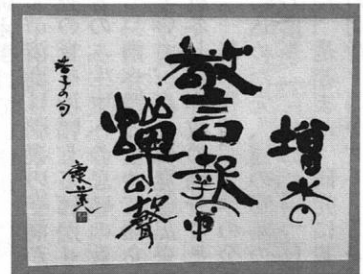
小川三胡句
行正春草氏揮毫

夏越祭音なく掬ふ神の水



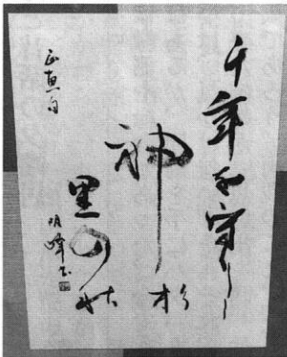
近常倫子句
柴田峰苑氏揮毫

華隠れに余花の紅二三輪



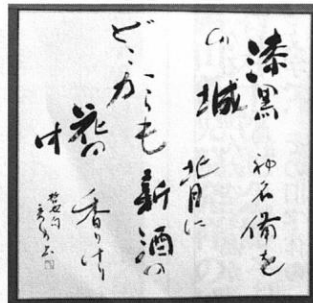
植田浩子句
滝本康美氏書

増水の警報の中蟬の声



左居正恵句
小竹明峰氏揮毫

千年を守りし神杉里の秋



大森哲也句
松浦麗水氏揮毫

漆黒の城どこからも花の中



小林美鈴句
川崎湖山氏揮毫

梅ふむひとさじからの離乳食

合同句集第十七集刊行

一句鑑賞 2

揺り椅子に読みかけの本鳥渡る

広畑美千代

一読、情景が目には浮かびます。叙景句としての鑑賞もできますが、叙情句として読ませていただきます。縁側の揺り椅子に葉をはさんだ本ではなく、ページを開いたまま伏せてある本ではないでしょうか。ゆったりと読書を楽しんでいて、ふと目を上げると青空に渡り鳥の影がありました。しみじみと秋の深まりを感じるのと同時に、何かやることを思い出したのでしよう。本を伏せたまま立ち上がりました。すぐ戻ってくるつもりで……。揺り椅子に揺れを残して。当人はどんな用事をしに行ったのでしょうか。それは大それたものではなく、ほんのちよつとしたことだったのではないのでしょうか。すぐ戻ってきてすぐ本を取りります。何をしに行つたかも知れませんが、その本の内容も気になります。読み手にいつばいの余白を残してくれる佳句だと思います。(景山 薫)

泣く笑ふ拗ねる子もをりかるたとり

吉田 智子

正月の風景を、言の葉なるカメラで鮮明に切り取っています。そしてその写真、子たちをあずかる作者にとって、忘れられない一枚となったのでしょうか。また同時に、子たちにも思

い出の一枚と。

泣く笑ふ、に続く「拗ねる」の一語で、一気に臨場感を高めています。にぎやかな輪のなかにも、素直に身を委ねられない子がいる。でも、そんな子を含めて、きつと「愛しきもの」なのでしょう。

さて、「俳諧は三尺の童にさせよ。初心の句こそたのもしけれ」と論じたのは、芭蕉翁です。昨今、奇をてらい・技巧を弄した難解な俳句が横行するなか、この作品は過ぎ行く刻の一瞬を、平易な言葉で簡潔に描写しています。

子たちへのたゆまぬ愛情を、ひしひしと感じられる心温まる一句です。(児玉 慎二)

立て掛けし琴の裏より春蚊出づ

柴田 奈美

ようやく暖かくなつて来た春の日の午後、生家の座敷に入ると、床の間の横に琴が立て掛けられたままとなっています。近づくにつけて裏から「ブーン」と一匹の春蚊が……。成虫のまま厳しい冬を生き抜いた蚊の羽音は、何かを訴えかけています。「琴」は「言」に繋がります。演奏は胴裏の空洞が、上に張られた13本の弦の音を増幅して聴かせます。胴に詰まった奏者の「生」への思いの数々が、琴爪で弾くことで「調べ」となって語られます。立て掛けられていて、自らは発信出来ないこの琴は、一緒に越冬した春蚊の羽音でそれを伝えているのです。一年半程前、大学の公開講座で十七音の短詩に込めた先人達の葛藤の数々を先生から聴かせて頂き「言葉の美」「言葉の力」に感動しました。是非また、研究に基づく俳句への熱き思いの羽音を聴かせて下さい。(山下 卓郎)

妹と昔話の夕端居

植田 浩子

昔は縁側や縁台があつた。今でも日本家屋に縁側はあるが、団扇を手にはパタパタと談笑している姿は、見かけ無い。それぞれ、長い年月を過して来た姉妹が、思い出を語り始めると時間は無限であろう。両親のこと、幼少の頃のこと、お互いの家族のこと……。

姉も妹も居ない私には羨しい限りである。お二人の長寿と、ご多幸をお祈りしたい。(神宮寺恵子)

秋麗や児は鳥の字が好きと言ふ

樋口千恵子

秋になると澄んだ空を鳥が渡るのを見ようになります。「鳥」という字は、鳥の姿を表した象形文字で、その旧字体の「𪖇」は鳥(海鳥)の「山」の上に鳥が載っている様子を表しているといわれます。ならば、カツオドリ、アホウドリなどの大型の海鳥を「山」の上に載せたくなりますが、秋の季語「鳥渡る」の鳥たちは、鳥で休みながら大海原を越えて日本に飛来します。我が家の庭には、今年もシベリアあたりから綺麗な可愛いジョウビタキが飛来しました。この児は授業で漢字の成り立ちを教えて貰ったのでしょうか。きつと空に向かって羽ばたく様子を表すという「鳥」の字が面白かったのでしょうか。「鳥」は空に、そして海にも繋がります。「鳥」の字は、「秋麗」という季語を得て、地球規模の佳句となりました。(畑 毅)

揺るるたび雲に紛るる花樗

角南 英二

花樗の淡紫色の小さな花は、まばらに咲きほろほろと散る。透き通って見える瞬間、自分だけの感覚ですが、幻と現実、時間も空間も紛れ、日常と区別がつかない一瞬を感じさせます。

俳句は読み手の自由に委ねるとさせて頂ければ、思い出に繋がります。半世紀も前のこと。祖父の家の前の川岸には樗の大木がありました。肺を患っていた祖父の最後の願いは「樗の木の下で思いきり息を吸いたい」でした。私の記憶の祖父は樗の木の下で、川向こうの山を眺め煙草を燻らす後姿です。

表題の「紫苑晴れ」は紫苑の淡い紫の花とも響き、静謐な美しい句と感銘を受けました。

(中尾かすみ)

百足虫ゆる踏みにじられて果てにけり

清中 蒼風

夏です。さつそく出現。

毘沙門天の使いとされている百足虫は、触れたものにはすぐに咬みついて攻撃します。

さてさて百足虫は不幸にも嫌われものとして生まれました。里山に住んでいると、百足虫の出現は誰もが経験している日常のことです。作者もまた出合うことが多いのかもしれない。「アッ」出た。慌てて足で踏みにじってしまったのです。罪深くもあり、殺生はしたくないのですが。

虫も殺さぬ作者でしようが「百足虫ゆる」なのです。踏みつけ、果てる。これでもかと詠まれています、その動作はごく自然体ですらり

と、しかも重たくなっていな一句となりました。(松尾 佳子)

ちちははの在す日溜り山眠る

正垣セツ子

冬景色の山裾に墓群か又は一基の墓がある。そこには身罷つて久しい父母が永遠の眠りについている。風もなく静かな日溜りの中で安らかに眠っている。永遠の眠りと大いなる自然の巡りの中の眠り、「山眠る」の季語が景を大きく深いものにしていて感じました。亡き父母への深くあたたかな思いを感じました。

(古谷 静)

もの縫ふも書くもこの椅子去年今年

樋口千恵子

この句は私自身の幼い頃を思い出させてくれました。居間には丸い卓袱台があり、家族揃って食事を囲み、勉強をするのもこの卓でした。この方は人生を楽しむがらすこしずつ断捨離をされているのではないのでしょうか。しかし一番思い出の深いお気に入りのその椅子はずっと大切にそばに置いておきたい、今年もまた……。

そんな作者のお気持ちがよく伝わりました。

(中山 敏子)

本業の稲刈る神楽太夫かな

浮田 雁人

備中神楽は国の重要無形民俗文化財に指定さ

れている。主に正月や祭礼に招かれて舞う。太夫は神楽面を付けているが、長年続ければ素顔を知られることも多い。作者は偶然見覚えのある人が稲を刈っているのに出会った。一瞬「えっ素戔嗚尊命が稲刈りを」と呟いた。そして、いやいや、太夫は各々仕事を持つ一般人と聞いていたが、この太夫は農家の人だったのかと苦笑いして、見たままの事実を一句とした。但し、俳人の技として、冒頭にわざわざ「本業の」と置き、最後を「かな」で締めた。この事によって読者は言外の作者の錯乱をも読み取ることが出来、滑稽味のある味わい深い句となった。

(谷本 俊夫)

吟行地案内

石井十次記念館、

岡山孤児院発祥の地を訪ねて



児童福祉の父石井十次

東山の石井十次記念館、上阿知(岡山市東区)の岡山孤児院発祥の地を訪れ、石井十次に思いを馳せた。

まず、東山の新天地育児院の敷地内にある石井十次記念館へ。私にとつては、勤務地の近くにもかかわらず、来たことがなかった。館長の案内で、移築された岡山孤児院の在りし姿を目の当たりにし、よく考えられた間取りに感心し

た。広い記念聖園は静かで、マイナスイオンがあふれていた。

十次は岡山教会初の牧師、金森通倫に招かれ、宮崎から岡山医学校（現岡山大学医学部）に入學する。六年生の時健康を崩し、上阿知の診療所で療養していたが、隣の大師堂で偶然会った、子どもを連れた巡礼の母親に「このままでは行き倒れになる。子どもを預かってほしい」と頼まれたという。十次はこの少年を預かり養育することになった。このお堂が岡山孤児院発祥の地と言われるゆえんである。孤児院発祥の地の碑には、十次の朋友の徳富蘇峰による題額と十次を讀める碑文が彫られている。

この近くの廃園になった幼稚園に「石井十次に学ぶ会」が運営する「石井十次資料室」があり、貴重な資料やたくさんの写真が展示されている。十次は医学を断念し、三千人の孤児たちを救済することに専念した。福祉という言葉もなく、国からの援助もまったくない時代に各方面から寄付を集めようと奔走し、一人の餓死者を出すことなく、この活動を行った石井十次の行動力、精神力に、大いに感銘を受けた。

石井十次のことをもつともつと多くのの人に知ってもらいたいと思う。

三千の孤児の父像花菜風

（小野 純子）



石井十次記念館
（岡山市中区門田本町）

春季吟行句会

—岡山県天神山文化プラザ周辺—



会長挨拶

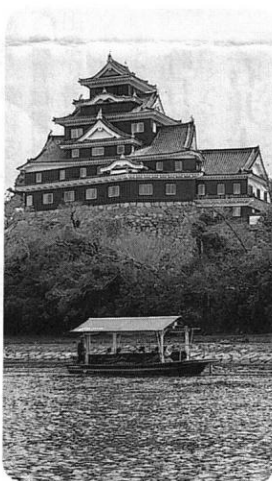
令和7年3月30日（日）岡山県天神山文化プラザ3F第2会議室を句会場に岡山県俳人協会春季吟行句会が9時30分受付、11時30分投句締切のち、午後1時、柴田奈美会長の挨拶により開会された。

当日は花曇りの空、花冷えの言葉通りの一日であったが、56名の参加者は各々プラザ周辺で吟行した。

プラザ北側の公園では根走りの山に巨岩が積み上がり、麓の椿や花桃が春の色を添えていた。「目刺し二本」で有名な土光敏夫さんの碑もあり、居合わせた句友と碑文を読んだ。岡山藩藩学跡地には岡山県岡山第二高等女学校、岡山県女子師範学校などの碑が並び、半円形の泮池を飾るように桜、海棠、赤く色付いた牡丹の芽、柳の芽と句心を大いに刺激された。泥の池には水蓮の新しい巻き葉も生まれ、人慣れしているのか、亀が寄って来てこちらを見上げている。この場所が市民に愛される憩いの公園となっているようだ。



カトリック岡山教会
殉教者聖ディエゴ喜斎像



岡山城と屋形船



岡山藩藩学跡吟行風景



句会場風景

先学の学問への思いに襟を正す気持ちになりつつ、歩を進め白いマリア像の輝く教会へ行った。園内の殉教の聖人喜斎聖ディエゴの像の深い眼差しを仰ぎ、敬虔な思いに浸っていると、折しも教会の鐘が鳴り、皆で聴き入った。岡山神社や旭川河畔にも春は溢れ、土筆摘みの親子、屋形船、桃の形のボート、残る鴨、鳥城では武將姿のガイド、石の神馬や絵馬等々句材に事欠かない、素晴らしい吟行地であった。句会参加者56名は11時30分の締切で三句出句、その後は昼食、談笑の時を楽しんだ。13時清記担当の方々のご尽力で168句がずらりと書き記された句一覧が配られ、選句に入った。選句終了後披露、併せて特別選者による自選句の講評、特選句、高得点句の表彰のち、15時閉会となった。

(北村 庸江)

特別選者特選句

柴田 奈美 選
殉教の像の折りや風光る

赤木ふみを

杉本征之進 選
ご破算にするタンポポの絮吹きて

山田 紳介

山田 紳介 選
春日差す小さき窓の懺悔室

高木 幸子

赤木ふみを 選
春日差す小さき窓の懺悔室

高木 幸子

谷本 俊夫 選
天心へ廃校跡の牡丹の芽

佐藤 淑子

互選高得点句

春日差す小さき窓の懺悔室
十字架に触れて真白き春の雲
春風のゆるり押し出す屋形船
天心へ廃校跡の牡丹の芽

高木 幸子
左居 正恵
高橋 睦子
佐藤 淑子



特別選者講評



吟行受賞者

白杖の一步一步に轉れり
走り根は巨石抱き上げ轉りぬ
春風や廃校守る金次郎
殉教の像の折りや風光る
漆黒の天守堂々桜まじ
聖人の遠まなざしや桜冷え
ご破算にするタンポポの絮吹きて
もつては風に解かれて糸柳
座射立射ひとりの弓場風光る

佐藤 史男
柴田 奈美
太田 捷子
赤木ふみを
山崎 淑加
藤原 照子
山田 紳介
松尾 佳子
高木 幸子

今後の主な行事予定

第46回岡山県俳人協会大会

11月2日(日) 国際交流センター2階
開会13時(受付10時30分より)
当日句締め切り11時30分

講演講師および特別選者 森田純一郎氏
当日句選者は都合により変更になることがあります

秋季吟行句会

場所 倉敷市児島産業振興センター
倉敷市児島駅前1-37

(電話) 086-4441-5123
日時 10月12日(日) 9時~16時

合同句集18集

8月1日に応募要領を会員の皆様にご送付予定
募集締め切りは9月29日の予定です。
令和8年3月配布予定

会報『鳥城』第89号発行 12月予定

写真 井本陽子 角南知子

会員の活躍

◇柴田 奈美

・短歌結社「樹林」講座

「正岡子規―俳句革新を中心に―」

令和6年5月25日 岡山市内

・漱石フォーラム「子規山脈の人々」

―夏目漱石と赤木格堂を中心に―

令和6年11月2日 岡山市内

令和6年7月

公益社団法人俳人協会評議員に推挙されま

した。(俳句文学館令和7年2月5日号)

・「俳壇」4月号

特集「行楽の春」春の行事季語を探る

俳句とエッセイ

「西大寺会陽復活」の記事掲載

◇涼野 海音

・第二句集「虹」上梓

「いくたびも虹仰ぎたる背広かな」他

(ふらんす堂)

・「俳壇」4月号

特集「行楽の春」春の行事季語を探る

一句鑑賞「大灘を日のわたりるる仏生会」

記事掲載

◇小林 美鈴

・第32回西東三鬼賞 秀逸

「夏蕨するずるずると活断層」

◇山本 一穂

・第32回西東三鬼賞 入選

「太古からはんざき未来からは日矢」

◇曾根 薫風

・「俳句四季」4月号

「ある句会」欄に掲載

(岡山刑務所にて月一回俳句指導)

「独房の窓に来るてふ恋雀」他7句

新会員紹介

(「鳥城」第87号以降)

久田 康世(馬酔木)

人の世の地図なき旅や冬銀河

佐藤みづゑ(馬酔木)

駅伝の伊勢路箱根路三箇日

藤山えいこ(だいこんの花)

神楽舞ふアメノウズメの喉仏

神田恵美子

空やさし春の香りをはこぶ風

大森 博子(嶺俳句会)

吊橋の海底泳ぐ鰯雲

宮脇 洋子(成羽俳句会)

この世から妣に出したや花だより

北村 庸江(馬酔木)

山笑ふミモザサラダのほろほろと

小倉登代子(椽)

神鶏の給餌箱にも初雀

お詫びと訂正

鳥城八十七号の俳句に間違いがありました。

訂正してお詫びいたします。

冬鴟の猛りの杜や冬紅葉(誤)

冬鴟の猛りの杜や忠魂碑(正)

編集後記

町中では珍しい緑に囲まれた静かな公園、土光敏夫記念苑は散歩コースの一つです。轉りを聞きながら、石のテーブル、石の椅子で寛ぐのは素晴らしいひと時です。

(広畑美千代)

岡山孤児院発祥の地で「石井十次に学ぶ会」の方々が熱心に活動されている姿に胸を打たれた。紙芝居の制作、上演、講演会、冊子の発行など。石井十次のことを一人でも多くの人に伝えたいと思う。(小野純子)

四月の中旬、東京の上野公園に寄つてみた。すれ違う人ほとんどが訪日外国人だったが、県内の観光地などでも多くの訪日外国人を見かける。インバウンドの波は地方へも来ているようだ。(小林克己)

桜が咲いています。馬上から桜を見ると初心者マーク付きですが、気分だけは「もののふ」になります。駆け足!(畑 毅)

先日、高山へ行きました。以前、お遍路の御礼参りでバスツアーで行きましたが、今回は個人旅行で、宿坊体験もすっかりすることができました。それにしても、外国人観光客の多いことに驚きました。

(原田慶子)

87号に続き、合同句集から一句鑑賞をお願いしましたところ、格調高い名文をいただきました。皆様の俳句への愛を感じました。(角南知子)